

《第二十五章・涅槃を考察する。》

第二項 [涅槃¹を考察する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く] に二項目がある。[反論]、[返答] である。

第一項 [反論]

ここに言う。「世尊が解脱を求める者達に、蘊²の有余と無余の、二様相の涅槃を説かれた。その第一は、すべての強盜を殺して村だけが残ったように、有身見³等の煩惱を尽く捨て去り、以前の業と煩惱が放った蘊のみが残った滅であり、経部より

『畏怖していない心によって、受を受け入れるならば、その心は解脱する。灯明が消えた如く。』

という。

第二は、全ての強盜を殺して村も破壊したように、全ての煩惱を捨て去っただけでなく、近取の蘊の残余とも離れた滅であり、経部より

『或る者において、身体が壊失し、想が滅した。一切の感受と離れ、行が寂滅し、識（知覚作用）が消え去った。』

という。

もし、内外のこれら全ての法（現象）は本性として成立したことが欠如するならば、起こる一生と、壊は僅かにも無いので、『煩惱であるものを捨て去る－捨て去ったことと、近取の蘊であるものが滅したことより、二涅槃の面より苦しみより超越するだろうと主張する』と、そのように主張することは正しくない。（何故ならば）蘊と煩惱は本性として成立していない故である。

それ故に、諸事物は本性として有る。」と言っている。

第二項 [返答] に四項目がある。[事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である]、[自説によって涅槃を認識する]、[それより他の方法で語ることを否定する]、[そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する] である。

¹ 涅槃：苦しみが無くなること。[第一章] 脚注 317 参照。

² 蘊：心身の集積。[序論] 脚注 88 参照。

³ 有身見：自らの五蘊（心と体の集積。[序論] 脚注 88 参照）の何れかを捉えることから起こる、「我（私）」と「我所（私のもの）」はその自相として有ると思ひ込む、煩惱となる見解（[序論] 脚注 85・86 参照）。

主な五つの誤った見解（五見）の一つ。[第 1 章] 脚注 104 参照。

第一項 [事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である]

もし、これら全ての内外の法（現象）は本性として有ることが欠如していなければ、本性として成立したものにおいて、以前に無く新しく起こることや以前に有り新しく壊れることは無いので、煩惱と蘊であるものを捨て去ることや、（それらが）滅したことより涅槃を得るだろうと主張することは正しくない。（何故ならば）本性として留まる諸々の煩惱と蘊は、無くなるとならない故であり、そのような本性において、退くことは無い故である。

第二項 [自説によって涅槃を認識する]

空性を語る者達は、本性として以前に成立していた煩惱と蘊が後に退く（無くなる）涅槃を主張しないので、「起こることと壊れることが無いことによって涅槃が適わない」という過失は無い。

「ならば彼らが、涅槃は如何なる性相を具えたと主張するのか」といえば。

貪欲等のように捨て去ったこと、善行の果のように得たもの、近取の蘊等のように断滅し、不空のように恒常—その四つとして、本性として成立しておらず、本性として滅と生が無く、一切の戲論⁴が寂滅した性相を持つそれを、「涅槃」と述べる。

それ故にそこに、煩惱が捨て去られ蘊が滅したことによって苦しみより超越しよう（涅槃を得よう）と欲す煩惱と、蘊が本性として成立したと捉える分別（概念作用）が何処に有ろうか。その二つの分別がある限り、涅槃を得たのではない。（何故ならば）それら一切の戲論（概念作用）が尽きたことよりそれを得る故である。

『仮に、涅槃を得た時には、煩惱あるいは蘊は勿論無いけれども、それを得た以前にそれらは本性として有るので、それらの戲論が尽きたことより涅槃を得たとする。』と思えば。

涅槃の以前に本性として有るならば、後に滅尽されることはできぬので、解脱を求める者はこの考えを捨てるべきである。（何故ならば）

「涅槃の果てであるものは、」⁵

等に説かれるであろう故と、『三昧王経』よりも

「涅槃において諸法（現象）の有性は無い。何かの法（現象）はそこに無く、それらは永遠に無い。有と無という分別を具え、そのように行う者達は、苦しみが寂滅することは無い。」

と説かれた。

⁴ 戲論：チベット語では「放たれたもの」という。二元として現れたもの。認識主体が認識対象を自らとは別ものとして認識する時の対象、又はそのように意識に現れること。

「煩惱の戲論」「実在の戲論」「概念作用の戲論」「認識主体と認識対象が二元に現れる戲論」等がある。

⁵ 「涅槃…ものは、」：『根本中論』第 25 章 20 偈。

その意味は、余りの蘊の無い涅槃（無余涅槃）の界においては、業と煩惱と、その果が生じる性相を持つ蘊の諸法（現象）と離れたので、それらが有るのではないことは、対論者全てが肯定する。

「そこに無いそれらの法（現象）は、永遠に一如何なる時も無い。」と説かれたことによって、輪廻の時においても真如として有るのではないと示された。

『ならば如何様に輪廻するのか。』と思えば、眼障を持つ者に落髪等として映るように、我と我所であると捉える誤りの鬼によって捕えられた幼子達に、真実として映ることは、後二行によって説かれた。それも、有ると分別するのは伺察派と自在天派と数論派⁶等、毘婆沙部⁷に（実在の見解が）類似するものと、無いと分別するのは順世派⁸と、過去と過去でないもの（未来）と無表色と心不相応行は実質として無く、それより他は有ると語る者⁹達と、遍計所執は自らの性相として無く、他の二自性は本質として有ると語る者¹⁰である。

「もし、一行目の意味が『無余涅槃の界において苦集¹¹の諸法（現象）が無い』というのであれば、『小乗の阿羅漢が〈寿命の行〉を手放したならば知覚の継続が停止する』と主張するので、そのように語りもしようが、自派ではそれらも最終的に成仏するだろうと承認するので、その涅槃において、蘊の残余の有無を如何様に約言するのか？」¹²といえは。

『六十頌如理論註』より

「経典より、『この蘊を残らず捨て去った、確実に捨て去った、浄化された、

6 伺察派…数論派：非仏教徒の学派。順にミーマーンサー学派・ニヤーヤ派・サーンキャ派。実在を基礎とした教義を持つ。

7 毘婆沙部：小乗、部派仏教の学派。実在を承認する。

8 順世派：非仏教徒の学派。輪廻転生、業の因果等を否定する。ローカーヤタ派。

9 過去と…語る者：仏教徒経量部。過去と未来は現在に存在しないので、概念作用の対象として有るのみなので実質が無く、無表色（表れとしての形色が無い事物。戒律等）と心不相応行（知覚でも形色でもない事物）も、認識できる事物に依拠して名付けられただけの存在なので実質が無い。それより他の事物は直接認識できるので、実質として有るという。

10 遍計所執…語る者：仏教徒唯識派。有無を三自性に分類する。

遍計所執性（全て名付けられたもの。空性以外の恒常）は概念作用の対象として有るのみなのでそれ自体の性相は無く、他の円成実性（空性）と依他起性（他に依拠して起こるもの。事物）はそれ自体の性相、本質があるという。

11 苦集：四聖諦（聖なる四つの真実）の煩惱方向の二つの真実。苦諦（苦しみの真実）・集諦（苦しみの原因の真実）。清浄（解脱）方向の真実は滅諦（苦しみとその原因が滅した真実）・道諦（滅諦を得る為の修行道の真実）。

12 「もし…するのか?」:『三昧王経』の偈 1 行目「涅槃において諸法（現象）の有性は無い。」の意味を、「無余涅槃において苦集の現象全てが無い」とすれば、小乗学派では「阿羅漢は死ぬ時に命の営みを手放して、何もなくなる」というので、その通りに説明もしようが、自派では「阿羅漢は死んでも意識の継続は残り、後に大乘の修行道に入って仏陀の境地を得る」とする。ならば有余涅槃と無余涅槃をどう説明するのか?

尽きた、貪欲と離れた、滅し、寂滅した、消え去った、外の苦しみに繋がらず、生じない。これが静、これが妙であり、このように一切の蘊を確実に捨て去った、愛欲が尽きた、貪欲と離れた、滅、涅槃である。』と、蘊が滅したことより苦しみより超越した（涅槃）とおく。」

と説かれ、蘊が尽きた意味を、蘊の一方向である煩惱が尽きたと説くことを否定して、苦しみの蘊の総体が尽きたことを、蘊が尽きたとしなければならないと説かれた。

それも蘊の継続が尽きたことにしたならば、蘊が尽きていない時には得られるものである涅槃は無いが、蘊が尽きた時には（涅槃を）得る者が無いので、涅槃を得ることは有り得ないという過失を示して、

「もし、苦しみの本性は生じることが無いと見るならば、その時、その場合にもその生は認識されない故に、その苦しみが尽きたのみとなれば」

と、五蘊とも本性として生じることが無いと直覚として見る時、その認識面において蘊が無いことを「この蘊を残らず捨て去った」と説かれた意味であると承認された。

然れば、小乗行者が煩惱を尽く捨て去った時、等引¹³の認識面において蘊の現れが残らず消え去った滅を、その無余涅槃と、その現れが消えていない後得¹⁴の時はその有余涅槃であると置くのである。

第三項 [それより他の方法で語ることを否定する] に三項目がある。[涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する]、[涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す]、[それによって成立した意味] である。

第一項 [涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する] に三項目がある。[涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する]、[その二つの極辺を主張することを否定する]、[双方でない極辺を主張することを否定する] である。

第一項 [涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する] に四項目がある。[涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する]、[無事物の極辺であるとの主張を否定する]、[二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか]、[二極辺の見解を教示者が叱責する方法] である。

¹³ 等引^{とういん}：空性を直覚する瞑想。

¹⁴ 後得^{ごとく}：空性を直覚する瞑想から覚めた後の智慧。

第一項 [涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する]

毘婆沙部達は、「涅槃とは、水の流れを止める堤のように、業と煩惱と、後の生の継続に入ることの止めるものであるので、事物である。(何故ならば) 無事物は意味を為すことができない故である。

仮に、経典より

『喜の貪欲と一緒に愛欲が尽き、貪欲と離れ、滅であるものは、涅槃である。』

とただ愛欲が尽きただけと説かれ、

『灯明が消えたように、その心は尽く解脱する』

と説かれたので、『灯明が消えたことと、ただ煩惱が尽きただけのことは無事物であるので、事物であるとは正しくない』といえよ。

『愛欲が尽きた』と説かれたことによって、ただ愛欲が尽きただけを涅槃であるとは示さない。しかし、その涅槃が有れば、その効果によって愛欲が尽きることが『愛欲が尽きる』という意味である。『灯明が消える』とは煩惱が尽きた単なる例であるが、それも『それが有れば、心が解脱する、あるいは解放される』となる涅槃である。』と示すので、無事物であると示す根拠ではない。」と言う。

先ず、涅槃は、煩惱と生の以後の類似種が滅す事物ではない。(何故ならば) 事物であれば老一外に変化することと、死一壊れる性相を持つ背理となる故であり、事物はそれに似た老死(の性質を持つこと)に間違いない故である。

「他に変化する老と、壊れる死の無い事物は、有るのではない。」

とは、事物は老い死ぬことにおいて間違いのないことを明らかにするものである。老死の性相を持つものであれば、涅槃ともならない。

他にも、もし涅槃が事物であるならば、涅槃は有為となるだろう。その異品遍無性¹⁵において、「有為ではない『抛るもの』である内外の事物は何も、場所や時間や学説の如何なる拠所にも有るのではない。」¹⁶と説かれた。

他にも、もし涅槃が事物であるならば、如何様であればその涅槃は自らの因の集合に依拠して生じるのではないのか一生じるのである。その異品遍無性において、「自らの因の集合に依拠して生じない事物は、何も有るのではない。」ということ

¹⁵ 異品遍無性いほんへんむじょう : 因三相いんさんざう ([第 1 章] 脚注 196 参照) の一つ。主張命題の述語の反対の意味は全て理由ではないこと。

¹⁶ もし涅槃が…説かれた。: 「涅槃は、有為である。(何故ならば) 事物である故に。」という論式を立てた場合、異品遍無性は「有為でなければ、事物でないことが行渡る(有為でないものは全て、事物ではない)」となる。従って、「有為ではない『抛るもの』である事物は、如何なる拠所にも有るのではない。」となる。

で説かれた。¹⁷

そのように、第一と第三の背理によって、有為の性相である生と壊と他への変化の三つを具えることと、第二の背理によって事相¹⁸である有為が事物に行き渡ると証明して、行き渡るものを否定した面より、含まれるものである「事物であること」を否定する。¹⁹

第二項 [無事物の極辺であるとの主張を否定する]

経量部等は、「斯くも説かれた過失となるので、涅槃が事物でないことは真実ではあろうが、煩惱と生がただ無くなったのみであるので、涅槃は無事物である。」という。

「これは、否定対象である煩惱と生が無くなっただけの無事物である」と主張することを、勿論否定はしない。しかしながら、その無事物として有ることも、世俗名称に従って設けられたのみではなく、自らの自性として有ると主張するので、それを否定するのである。

「もし、涅槃が事物でないならば、無事物として自らの本質によって有ることも、如何様に適うとなろうか。」といい、ならない。このように、ある方向として既に示した過失によって、涅槃は事物ではないその方向に—それによって、涅槃が無事物として自らの本質によって有ることも、承認されるに適正ではない。(何故ならば) 他に变化する事物を「無事物」と言う故と、事物が本性として有ることを既に否定したので、本性として有る事物が他に变化することは正しくない故である。

もし『無事物において、事物の一部特性が他に变化することが行き渡るのであれば、そのようであろうとも、そうではない無事物は多く有るので、その理由²⁰によって涅槃は無事物として自らの本質によって有ることを如何様に否定したのか。』と思えば。

一切の無事物において、そのように行き渡りはしないけれども、無事物が自らの本質として有るならば事物である必要があり、その時「このようなものである事物が無い無事物」と設ける方法は、一つの事物が他に变化する面から主張しなければならぬ故に、過失は無い。

¹⁷ もし涅槃が…説かれた。:「涅槃は、自らの因の集合に依拠して生じる。(何故ならば) 事物である故に。」という論式を立てた場合、異品遍無性は「自らの因の集合に依拠して生じなければ、事物でないことが行渡る(自らの因の集合に依拠して生じないものは全て、事物ではない)」となる。従って、「自らの因の集合に依拠して生じない事物は、何も有るのではない。」となる。

¹⁸ 事相: 性相を認識する拠所になるもの。

¹⁹ 行き渡る…否定する。:「事物」全てに行き渡る「有為」を否定したことで、「有為」に含まれる「事物」も否定する。

²⁰ その理由:「他に变化する事物を『無事物』と言う故と、本性として有る事物を既に否定したので、本性として有る事物が他に变化することは正しくない故である。」という理由。

もし『涅槃とは、煩惱が尽きたことと、業と煩惱の力によって再度生まれることがただ無いだけであるので、無事物である。』と思えば。

そう見るならば、煩惱と生の無常そのものが涅槃となる。(何故ならば) 煩惱と生が無いことがまさしくそれであり、それより他ではない故である。然れば、その二つの無常そのものが涅槃であるとなるが、そのように主張するのでもない。(何故ならば、そう) 主張すれば、勤める必要無く解放されるとなる故である。

解説がそのように説いたことに対して、『涅槃を、煩惱と身体を得る生が再度起こらぬだけであると主張する者に対して、煩惱と生の二つの無常が涅槃となる背理を述べるこれは、無関係である。』と、こう思えば。

それを得た以降再度煩惱が起こり得ないという「煩惱が生じないこと」は、以前に有る煩惱が第二時目に失壞した無常では勿論ない。しかし、未来に煩惱が生じないことが自らの本質として有るならば、以前に有る煩惱が第二時目に失壞したこととその二つが別の意味であることを否定した理由によって、その二つは一つになると示したならば、そのように承認しなければならぬので、過失は無い。

他にも、もし涅槃が事物ではない—無事物として自らの本質によって有るならば、例えば青の無事物である、青が失壞した無常は、青に依拠して設けるが如く、涅槃も如何様であれば自らの否定対象である事物が失壞したことに依拠して名付けるのではないのか—そうして名付けるのである。

『もし、事物に依拠していない無事物が無ければ、ならば石女の子等は如何なる事物に依拠して無事物となろうか。』と思えば。

第十五章²¹で

「もし、事物が成立していないならば、」²²

等が説かれた如く、他に变化する事物を無事物と世間では言うので、石女の子等をこれに似た無事物であると誰が言ったのか。

「ならば、

『虚空や兎の角や、石女の子等も、無いながら言葉として述べられたように、事物に依拠したのもその如くである。』

と経証よりそれらは事物として無いと説かれたことと反する。」といえは。

それについては、事物を否定したのみを無事物であると説かれた。しかし、無事物として本質によって有ると示すのではない。(何故ならば) 事物そのものが本質として成立していない故である。

ここで、「兎の角等の存在していないものは無事物ではない。」と説かれたことは、事物が失壞した無事物と、自らの本質として成立した無事物を否定するのであるが、

²¹ 第十五章：「本性を考察する」(『正理の海』ゴマン版では「五章」と書かれているが、直後の引用で『根本中論』第 15 章 5 偈を挙げているので、「十五章」と訳した。)

²² 「もし…ならば、」：『根本中論』第 15 章 5 偈 1 行目。

単に事物が無いだけのことでないと承認されたのではない。(何故ならば)「事物であるという分別を否定しただけのことであるが」と説かれた故と、他の場合においても事物が無いと何回も説かれた故である。それ故に、「事物に依拠して名付けるのではない無事物は、自らの本質として有るのではない。」というこの説が留まる。

第三項 [二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか]

「もし、その涅槃が事物と無事物の本質として有るのでなければ、ならばそれは何であるのか？」といえば。

「長短」のように自らの因縁の集合に依拠して名付ける、或いは「灯明より光が生じる」ように自らの因縁の集合を因として名付けるものである、以前(前世)の世間よりここに来てここより後(来世)の世間へ赴く生死が一つ一つ連なる事物が、自らの因縁の集合に依拠したのではなく(因縁の集合を)因として入り込むのではない、煩惱と蘊の戲論が前述のようにただ良く寂滅しただけのことが涅槃であると、世尊が示された。ただそれだけのことは事物でもないが、無事物として、本質として成立したのでもない。

あるいは、依拠して輪廻に入るとは、前述のように行が廻る輪廻と、近取の蘊を因として入るとは、前述のプトガラが廻る輪廻である。

ここで、煩惱の種子を捨て去ったことと、近取の蘊の現れが消え去った基となった心の法性を涅槃とするが、煩惱等の因縁が途絶えたことより後の類似種が生じていないことは涅槃とはしない。(何故ならば)それは以前の因が尽きたことによって生じられる未来であると、既に説いた故である。

第四項 [二極辺の見解を教示者が叱責する方法]

他にも経典より

「比丘達よ。起か壊によって有(輪廻)よりの出離を探求する者達は、遍く知らぬのである。」

と、「起への愛欲」と「壊への愛欲」は捨て去られると教示者が説かれ、涅槃は所断²³ではないと説かれた。それ故に、涅槃とは事物ではなく、無事物の本質として有るのではないと正しい。

もし、その二つの本質として有るならば、涅槃も捨てられるもののみとなるが、事物である起と、無事物である壊を本性として成立したと執し、執着する愛欲によって輪廻より出離を求める者を叱責することも、不合理となるだろう。

²³ 所断：捨てられるべきもの。対治によって捨て去られるもの。

第二項 [その二つの極辺を主張することを否定する]

ある対論者のようであれば、『煩惱と生を受けることの二つの事物が無いので、涅槃は無事物であり、それ自体が事物の本質であるので、〈その二つとして本性によって成立した〉と主張する説に対して、その二つそれぞれに揭示した過失が批判することは無い。』と思えば。

これは非仏教徒梟派（勝論派）が主張すると『般若灯論註』より説かれた。解脱とは「世間集」²⁴という成立した浄土の性相であり、「命者」の語意が留まるので事物であり、輪廻の苦しみが途絶えるので無事物でもある。それも、

「勝者が説かれた解脱は、月や、エビラ菽の汚れの無い色で、乳や真珠や霜の色に似て、形は逆さまの丸い傘の様である。」

と説かれたようなものが一切世間の上に留まると言う。

仮に、涅槃である解脱は事物と無事物の二つともに本性として留まる。その時、事物と無事物が解脱するとなる。それ故に、自らの我性を新しく第一瞬間目に得て、第二瞬間目にそれと離れる一切の行が解脱であるとなるけれど、それらが解脱であるとは正しくない。これは、火と煙のような一事象に、自らの本質によって他として成立した因果を主張するならば、他の何であろうと一切も因果となる背理を述べた如く、事物と無事物の一部特性に本性として成立した解脱を主張することに対しても、「そのようであれば、その二つの一切も解脱となるだろう。」と、等しい理由を適用する。

他にも、もし涅槃が事物と無事物の二つとして本性によって定立したならば、その時、涅槃は因縁に依拠していないのではなく、依拠して生じるとなる。（何故ならば）本性として成立した事物と無事物の二つは、因縁に依拠して生じる故である。涅槃が無事物として自らの本質によって有るならば、その無いとなる事物は、輪廻の事物が失壊した無常を主張しなければならないが、そのようであれば、それは事物に依拠して生じる論理である。

他にも、「如何様であれば、涅槃が事物と無事物の二つとして、自らの本質として有るのであろうか。」—有るのではない。（何故ならば、そう）有るのであれば、涅槃は無為ではなく有為となる故である。このように、事物と、輪廻の事物が尽きた無事物として自らの本質によって成立した二つともが有為である故であり、それはその事物の失壊であるが、

「生の縁によって老死」

と、死である失壊も、生という縁より生じると説かれた故である。

「仮に、涅槃は事物と無事物の本性であると主張しないが、それにその二つがあると主張する。」といえ。

涅槃に、如何様であれば事物と無事物の二つが本性として有ろうか—それは無い。

²⁴ 「世間集」: 'jig rten 'dus pa

このように、一つの基体にその二つが自らの本質として有るのではない。(何故ならば) 互いに反する故に、光と闇の如くである。

もし、「その基体に、壺の事物が有ることと、絨毯の事物が無いことが有ることの二つは矛盾しないが如く、涅槃にも輪廻の無事物が有ることと、解脱の事物が有ることの二つは矛盾しない。」といえば。

事物と無事物が自らの性相として成立したならば、一つの事物が有れば全ての事物が有り、一つの事物が無ければ全ての事物が無い必要があるので、最終的には一つの基体において一つの事物が有無二つともであると承認されなければならない。

第三項 [双方でない極辺を主張することを否定する]

もし、涅槃は事物でもないが無事物でもなく本性として有ると、示すもののようにであるとしても、正理ではない。所知において無事物と事物が本性として成立したならば、それらの一部特性を否定した面から、事物の一部特性と無事物の一部特性の幾らかが本性として成立するとなるだろうが、その二つの何れも本性として成立したことはあり得ないので、それぞれを否定したもう一方も、本性として成立するとはならない。例えば、「兎」と「角」があり得なければ兎の角を否定したこともあり得ないし、「石女」と「子」があり得なければ石女の子を否定したこともあり得ぬが如くである。

他にも、もし涅槃が事物と無事物ではない本質として本性によって成立したならば、「それに似たものは、事物ではなく無事物ではない本質として、本性によって有る。」と何がその涅槃を顕かに一認識し、明らかにするのか。仮に、無余の時にそれが有るならば、その時に我が有るとなるが、そのように君は主張しない。(何故ならば) 近取の蘊の無い我が有ると主張しない故と、無余の時に蘊の継続が途切れると主張する故である。

仮に、その時にその認識者が無ければ、涅槃がそれに似た本質として有ると何によって知るとなるか。もし「輪廻に留まる者が肯定する。」といえば、それは一体、(意)識が肯定するのか? 智慧が肯定するのか? 前者は正理ではない。(何故ならば) 識とは戲論(二元的な意識作用)に映る様相を対象とするのであるが、涅槃を実現した認識面には、戲論(二元的な意識作用)に映る様相は僅かにも無い故と、ここで肯定するとは直覚として(意味を)認識する場合である故である。真如の意味を直覚として了解する智慧が肯定認識すると主張しても正しくない。(何故ならば) その智慧は本性として成立したことが欠如する空性と一味に入ったものである。本性として有るのではないが、それによって本性として有る涅槃を肯定することはしない故である。(何故ならば) 智慧は戲論(二元的な意識作用)に映る一切の様相より超越したものである故と、涅槃は本性として有ると捉えれば、様相を捉える束縛である故である。

ここで（意）識と智慧の二つに分けたことは、戯論（二元的な意識作用）に映る現れが消失する・消失しないに従って分類したが、五蘊のなかの識蘊として分けたのではない。

第二項 [涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す]

斯様に涅槃について、事物等であると考えた四分別によって捉えられたように（涅槃は）無いが如く、涅槃の会得者世尊は、涅槃を得てから本性として有ると顕らかではない—認識されるものとして無いが、その如く「かの苦しみより超越した（涅槃を得た）その事物は無い。」ということも、本性として成立したことは無い。その二つが無いので、その有無の双方が集まって有ることと、双方が集まることは無いので「その有無の双方ではない本質として、本性として有る。」とも顕かでない—認識されるものとして無い。

他にも、世尊が御存命であった時であろうとも、本性として有ると顕かではなかったが、その如く「無として本性として有る」とも、「有無双方の集合として本性として有る」とも、「双方ではなく本性として有る。」とも顕かではなかった。これは「如来を考察する」²⁵で既に説いた。

第三項 [それによって成立した意味] に二項目がある。[輪廻と寂滅が平等性であると成立した]、[無記の見解の否定が成立した] である。

第一項 [輪廻と寂滅が平等性であると成立した]

教示者が御存命時と、涅槃を得られた時の二時点において、四極辺と離れた・離れていないの違いは無い故に、輪廻は涅槃より、そして涅槃は輪廻より、互いに真偽の違いは僅かにも有るのではない。正理によって先のように尽く分析したならば、本性として成立したことが欠如する本性は、全く等しい故である。

それ故に

「比丘達よ。生と老死の輪廻とは、始まりと終わりが無いのである。」と説かれたことも、まさしくこのあり様において合理である。（何故ならば）前の輪廻と後の涅槃の二つとも、本性は等しい故である。

このように、涅槃の正しい辺（真実）である空性の空であるあり方は、輪廻の正しい辺（真実）である空性の空であるあり方であり、その二つにおいて、違いは僅かにも有るのではない。

第二項 [無記の見解の否定が成立した]

有（輪廻）と寂滅（涅槃）は、本性は違いが無いので、前と後の果てを考えるこ

²⁵ 「如来を考察する」：『根本中論』第 22 章。

とは適わぬだけではない。或る如来が涅槃を得られた、あるいは亡くなられて以降、有と、無と、(有無の) 双方と、(有無の) 双方ではない本質として本性によって有るとする諸見解は、涅槃に依拠して、最高に(実在として) 捉えることに入ったのである。

「果てを具える世間と、」²⁶

等によって含められた、果てを具えぬことと、双方と、双方でない本質として本性によって有るとする諸見解は、後の果てに依拠して入る。そこで、我と世間について、未来(来世)の生を見ていなければ果てを具え、生を見るならば果てを具えておらず、幾らかに見て幾らかに見なければ双方と、二つともを否定したことによって双方でないとする分別が生じる。

「世間は恒常であると、」²⁷

等によって含められた世間が無常であることと、恒常無常の双方と、双方でない本質として本性によって有るとする諸見解は、前の果てに依拠して入る。そこで、我と世間について以前の過去時において生を見る、見ていない、一部分を見て一部分を見ていないことによって、そしてその二つともを否定したことによって、恒常である等の分別が生じる。

これらの見解は、本性として成立した事物が有るならば勿論合理ではある。

しかし一切の事物は本性として成立したことが欠如するにおいて、果てが有ると、果てが無いと、果ての有無の双方と、果てが有るのでも無いのでもないとする見解や、「身体であるそのものが命者である」と「身体も他であり命者も他である。」ということや、恒常と、無常と、恒常無常の双方と、双方ともでないと見る見解によって捉えられたような、如何なる意味が有ろうか—(それは) 無い。

事物に本性として成立した自らの本質を捏造して、それと離れたことと離れていないことよりこれらの見解が生じさせられて顕かに執するこれが、解脱の都へと行く道を塞ぎ、輪廻の苦しみに繋げると知りたまえ。

第四項 [そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する]

「君が本性として成立した涅槃を否定したならば、教示者が、有情が涅槃を得る為に、煩惱を受用する対治として、それに随順する法を示したことは無意味となる。」といえ。

もし叙述内容である法と、聴聞者と、教示者は、本性として成立した何かが有るならば、そのようであるけれども、雁の王が空に自らの翼を羽ばたかせた風に乗る留まる、あるいは風が空に留まるように、仏陀世尊が一切の戲論が寂滅し寂静の本質である涅槃に、様相に留まらぬあり方によって留まる時、様相として捉える一切

²⁶ 「果て…世間と、」:『顕句論』より? 「世間は果てを具える。」

²⁷ 「世間…ことと、」:『ブッダパーリタ』より。「世間は恒常である。(『顕句論』)」

の対象は寂滅し、認識されていない故に、それに従えば、仏陀が天界か人界の何処においても、天あるいは人の誰にも、全くの煩惱か清浄の如何なる法も示さない。

「戲論が寂滅する」と「寂静」の二つは順に、涅槃に諸様相は入り込まないことと、本性が寂滅したこと。または言葉と、心が入らぬこと。あるいは煩惱と、生が起らないこと。あるいは煩惱と、薫習を残らず捨て去ったこと。あるいは所知と、知覚が認識されていないことである。

『如来秘密経』²⁸より、

「寂慧よ。或る晩に如来が、無上の正しく完成した菩提を顕かに完全に達成（成仏）され、或る晩に取る事無く完全に涅槃を得るとなるまで、如来は、延いては一文字であろうとも説かれていない。説かれるともならぬ。」

や、『三昧王経』より

「一切は言葉なく文字は無い。原初より寂静であり汚れ無く、諸法（現象）をそのように知る者、それは若者であると仏陀は述べられた。」

と説かれた。

「仏陀が誰にも法を示していなければ、これらの様々な善説での用語が、如何様に顕かになろうか。」といえは。

「教示者が我々に法を示された。」というこれは、無知の眠りを具えた、夢を見ている所化達の、自らの妄分別より起こったのである。

そのようにも『智慧顕明莊嚴経』²⁹より

「無漏の如来の、善なる法の映像のようなものである。ここに真如と如来は無い。一切の世間が映像を見ている。」

と説かれた如くである。

それ故に、涅槃の為に法を示されたことは、真如を理解する正理智の認識面には無いけれど、世俗名称に関わる知覚の認識面に有るのみであるので、それより涅槃が本性として有ると、何処でなろうか。

第二項 [了義の教証と合わせる]

「そのように、涅槃は本性として成立していないと示したまさしくそれが、深甚なる経証によっても成立したことと、涅槃は真実として無く幻のようであると示された一切を本章によって説きたまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部のみを示す。

大乘経部の末より

「涅槃が無いことが涅槃であると、世間の守護者が示された。虚空の結び目が解けるとは、虚空そのものが解いたのである。」

²⁸ 『如来秘密経』: de bzhin gshegs pa'i gsung ba'I mdo

²⁹ 『智慧顕明莊嚴経』: ye shes snang ba rgyan

と、長い紐によって縫う仕事をするその紐が、虚空において絡まったならば、虚空そのものからほどけるが如く、世尊が顕かに完全に成仏されてからも、涅槃等は眞実として成立しておらず、世俗の名称として有ると示し、本性が無いとも示す。

『梵天請問経』よりも、

「世尊よ。何らかの法（現象）が生じるか滅すと探求する者達においては、仏陀が現れることはありません。世尊よ。輪廻を事物として探求する者達は、輪廻より超越することはありません。

それは何の為かといえば、世尊よ。『涅槃を得る』ということは、一切の様相が尽く寂滅し、一切の分別（概念作用）が滅したことでありますが、世尊よ。善良に説かれた法である律において出家をして、非仏教徒の見解に落ちた彼ら愚かな者達は、このように、胡麻より胡麻油や、乳より新しいバターを得るように、涅槃を事物より探求する。世尊よ。『苦しみより全く超越した一切法（現象）において涅槃を探求する、顕かな慢を持つ者達は、非仏教徒である。』と私は説きます。

世尊よ。正しく入道した瑜伽行者は、如何なる法（現象）も生じる、あるいは滅すとはせず、如何なる法（現象）であろうとも得た、あるいは直覚として悟ろうと探求しません。」

と説かれた。

第三項 [意味を要約して章の名を示す]

諸法（現象）が本性として成立したことににおいては、所断を捨て去ったことや涅槃を得た等は適さぬことと、本性として成立したことが欠如する方向において、それら一切が合理であるさまを確認したまえ。

「涅槃を考察する」という二十四偈の我性、第二十五章の解説である。